

## 光なきシベリアの道

岩手県 富岡 衛四郎

夕暮れの中、我々を乗せた貨車は一路国境目指してばく進、郷里を出てから約五年余、今や祖国日本に帰れる思いでいっぱいであった。満州の十月は霜早く木の葉散り始め、山一面紅く染まり秋短きころである。絶えなく大きくゆれる二段装置に改造した居室、薪ストーブで飯盒たきつつ語り合う、外気は寒く戸を閉め外景色もすき間よりかすかにロシア領に入ったが地方の駅名もわからぬ。停車中には木片集め、水汲み、短時間のためドラム缶に一杯にならず発車ぎりぎり手を差しよばして登る。用便も走行中尻をさらけ出したるにたれ流し、室内に腐い臭いが入る。煙突の煙で顔手が真っ黒にすすける。

二、三日後汽笛が聞こえ、海だと喜ぶが工場であった。西へ進む方向である。シベリア行だ。一抹の不安がこみ上げる中、青々とした海、それはバイカル湖であ

る。ここまで来ては車中全員むなしいため息ばかり、沿線附近で同胞たちが手を振ってくれる。タイセット駅より分線密林地帯を走る。新しい鉄道と感じる丸太小屋が雪に包まれ、話から到着三か月になるそうだ。十一月三日の明治節も車の中で過ぎ、朝早く下車の命令が下った。シベリアの秋が早や冬でもある。積雪の中、仮小屋を建て炊事が始まった。残ったたき火で一晩中夜空を眺め眠れぬ一夜を明かした。

出発である。重い装具、毛布、食糧を背負い薄暗い山道、雪明かりを頼りに軍靴はすべり、転んでは起き、休憩には雪にごろ寝である。狼の出そうな樺唐松林の中、行軍が昼となく夜となく続く。寒気で飯盒の飯も周りは凍り中身だけ、箸は折れ指で掘ってやっと食べる。

約百キロ間、三日間で三十キロ点より百二十キロの収容所にたどり着いた。囚人用バラック、高いやぐらの展望台が四隅にあり、鉄条網が巡らされ、ロシア兵が嚴重に警戒し絶対に脱走することは不可能。小銃、機関銃が据えつけられ、屋外に人影があれば時々逃亡防止の威嚇射撃と、照明燈の光とともに銃声が夜空に響き渡る。朝

七時の点呼には約千名の大隊作業員整列に二時間以上の時間が過ぎる。計算する能力がない警備の兵隊ばかりである。

寒さで凍傷にもかかりそうだ。全員足踏み連続の波、食糧は満州から運んだ米、大豆、玉蜀黍、コーリヤン等塩辛い干魚で、味付け野菜をまぜた雑炊が飯盒のふたに一杯、マッチ箱くらいの小さい黒パンが一日二個、配給分配には真剣なまなざしの中、パンくずも山盛りにし平等に分ける。人間の本能である。労働作業途中、捨ててある魚骨、野菜くずをみつけては我れ先に奪う。作業は薪集め、木枝二、三本担ぐだけでも糸の切れた瓶のごとくふらふらと歩くのみ。貴重な煙草もなく、松こけ松葉を代用に吸う。手持ちの石けん、タオル、手袋等で兵隊と交換するが一週間と持たない。水汲み作業も味噌だる、醬油だるで遠い川より運搬、途中半分以上が凍りついてしまう。

零下二十度前後、軍靴では凍傷にかかり両足指真っ白、急に暖めれば腐ってしまう。布でもとどおりになるまでこする。激しく痛む。照明に白樺の皮を燃やし、食

事の分配。ゆらゆらと出るすずでのどがむせぶ。お互いの眼だけぎよろぎよろ光る。次々と到着する作業大隊の仮建築が始まった。土台の穴掘りも、二尺くらいも掘るのに一日二個。丸太の皮むきも三、四本、凍った土と寒気の闘いである。風呂とてなく小さいたるに湯一杯で体全体を洗わなければならぬ。洗面も口にふくんだ水を生温かくし、時々両手にため洗う。飲料水は炊事用だけ特に冬は欠乏し、飲む水は雪を溶かし、そのため多数の下痢患者が発生、栄養失調や伝染病が蔓延し、入院する者、朝起こしても返事がなく冷たく息絶えし戦友達が日増しに増加する。

十二月に入れば本格的冬將軍の訪れである。満州の寒さなど問題にならぬ。零下五十度から六十度低下の外気温。細かい氷の粉が空一面に立ちこめ舞い上がる。太陽の輪郭がはっきり見え、家畜たちも地上に黙って立って、じたばた動く。もちろん作業中止であり、気温が上があれば日中数時間のみの労働である。到着以来農場に出た。大根、馬鈴薯を盗んでは生で土のついたままかじる。家畜の飼料を持ち帰りストーブで焼いて満腹感を得

る。夜は南京虫の襲撃で寝れぬ夜が続く。痛いときには逃げるのが早いシラミ退治、次々と増え、あきらめるだけ。戦争は入隊四か月敗戦で終わり、捕虜の身、上官、将校、下士官、兵隊とて階級がない。同等の権利であるが、初年兵はいつまでも万年初年兵である。いまだ軍隊は存在している。悪どい厳しい命令と監督のもと、豚箱以下の地獄の規律生活が繰り返され、労働量終えぬ者は深夜残業が続く。

幾度夢に見る祖国へ果たして帰れるであろうか、凍りつく窓、寒風を聞き思いにふける農場の堆肥運搬も重いそりを引き、吐く息、まつ毛、鼻毛、真っ白く凍りつく。春五月残雪もまばら、土の表面に腐った馬鈴薯が現われ、澱粉化した固まりを焼いて食べる。白樺林に異国の地で倒れた戦友の墓標を後に出発で、だれ一人として訪れぬ奥地に捧げた句、残雪の異郷に墓標供造花、春の花未だ咲かず、寂しく造花が供えてある。暗い密林地帯も仲間の苦闘の労働で鉄道路盤はうねうねと赤土の盛り土が明るく続く。二百二十キロ目的地点、約五日間の行軍。山また山、奥地へと伐採した路もなく、湿地帯を渡

り仮宿舍に到着。テント生活と道路工事が始まった。大木を五、六人で担ぎ次々と丸太組み立ての道路が完成していく。重労働で体力の消耗が激しい。空腹に野草、茸、松の皮まで煮たり焼いたり雑炊量を増やし、蛇を捕まえ飯盒のふたで火でいり、油とともに最高の料理である。丸太道路終わり、二百五十キロ第四地区の鉄道建設開発に入った。幾百人の老木が鋸と斧で幅五十キロを境に切り開かれ、切り株は火薬で爆破。土工も七月の真夏の照り輝く太陽、共同作業も原始的一輪車運搬であり、突然倒れてきた木の下敷きで戦友が死んだ。また休憩中、赤い草の実取りに行つた同年兵が山に迷つて行方不明、時間になつても戻らぬ。警備兵が捜査することも許可せず。夕暮れの山に叫んでも山彦ばかり、次々と不運が起る。収容所の建築も、丸太づくり。本格的鉄道建設現場には毎日二キロの峠のある往復路、歩くだけでも汗が流れ、馬汗峠と名づけた。路盤に枕木レールの敷設遠く、列車の汽笛が懐しく身に沁み響きが聞こえる。

昼夜二交替で疲労ますます。夜の室内は恐ろしいほど静寂で山々には紅葉が過ぎ、また迎える厳寒が迫りつつ

ある。白樺の葉も散り秋景色は寂しさを増す。第二の故郷満州の開拓地の友達が繰り返しまぶたの中に映り出され、四年間の苦しい体験があったこそ自分もこのとおりに今日現在まで生きていられるのだと思えば不思議なぐらいである。食糧はますます栄養が落ち、しゃぶしゃぶした汁だけ。定期的の身体検査に、軍医から死の宣告にも等しい栄養失調、第四級が言い渡された。等級によって作業内容も違う。室内外の軽作業、掃除、水汲み、雑役等、もう今度はだめか。目の前は真っ暗闇、生きた幽霊そのものであり、ここで死んだら内地へだれが伝えてくれるだろうか。幾度も見て来た戦友たちの死と一緒に異郷の地に眠ってしまうのか。そうして我々の魂が遠いこの地でさまよい続けるのだろうか。

シベリアの三年間の正月を無事迎え、二日間の楽しい休日、友と郷里のうまい食物の話だけ、幼いころ思い出し、正月のお雑煮、お酒、羊かん、ミカン、いろいろと思いついてはつばがでる。正月用として特別の献立料理、普段より量が多く、魚のくん製の頭付、黒パンでつくったお酒、もったいなく少しずつ口に入れて時間をか

けて食べる。内地へ出した二回目目の往復はがきの返事が本当に戻って各自に配達された。最初一回目は日本へ書いて出しても着くのもうそかと皆んな破って捨ててしまった。このたびこそ夢のように海を渡りこのシベリアの奥地に到着したのだ。はがきの裏にはカタカナで細かくぎっしりと書かれてある。日本も敗戦後、三か年が過ぎ、復興が進んでいる文章が簡単に書かれ、年老いた父の字である。家内一同皆んな元気と何よりの一番の知らせでもある。いまだ帰らぬのはお前一人だけと最後に記されている。あと幾年後に無言会えるか、親に対しての親孝行であり、報いでもある祖国の土を踏むまで、今年こそ、明日こそ、一点の望みをかけ頑張るのだと一枚のはがきに勇気づけられ、必ず帰ると決意の涙がとめどもなく流れる。